

〈送信者〉

財団法人 四万十川財団

TEL : 0880-29-0200

FAX : 0880-29-0201

E-mail: office@shimanto.or.jp

URL: http://www.shimanto.or.jp

## 『人と自然が共生するまちづくり』をささえる人—四万十町—

清流通信読者の皆様こんにちは。今回は四万十町から、『流域植物関係のニュースソース』池田<sup>とみお</sup>十三生さんの話です。

池田十三生さんは、様々な顔を持つ。ある時は森の植物を案内するガイド、またある時はチェーンソーを持って間伐作業に従事する森林ボランティア、そして地域の歴史を語る語り部…等々と。長年勤めた町役場を退職したあとは、町の為に、自分を活かせるようにと、様々な活動に積極的に取り組んできた。

「絶滅危惧植物が見つかったので見に行きませんか？」時々、池田さんからこうしたお電話を頂く。それを見る為には、道なき道を分け入り、「何故ここにあることが分かったの？」という疑問を抱えつつ案内され…。おそらく、四万十町じゅうの大小の道や木の在処などの地図が、池田さんの頭の中にはしっかり入っているのに違いない。

農家の長男として生まれ育った池田さんは、幼い頃から父親の仕事を手伝ったりしながら、野山の植物に親しんできた。だから植物に詳しいとはいえ、その並外れた知識量や旺盛な好奇心、それはどこから来るのだろうかといつも不思議に思っていた。「どのようにして珍しい植物を探し当ててるのですか？」と伺えば、「まあ、秋ならキノコ狩りに行った時や、春なら桜を見に行った時とか、フッと見つけることが多い。」ふふっと笑いながらそう語る。私など普通の人では、フッとなんか見つけられません。

その池田さんに今回案内されたのは、四万十町奈路地区の山裾に広がる14haの遊休農地。暫く前まではよく手入れされた水田が広がっていたらしい。しかし遊休農地となって久しい今は、笹が生い茂りセイタカアワダチソウが黄色い花をつけ、

とても重要な土地とは思えない有様である。(と、私は思った。) 「ここに何かあるのですか？」という言葉を読み込みつつ、ついて行く私の前を大股に歩く池田さんが、突然しゃがみこんだ。そして指さしたその方向には、小さな小さな赤い花。「これが絶滅危惧1A種ヒナノカンザシ！今年はいぶん増えたようだ」。その花の付き方から『雛のかんざし』という愛らしい和名を持つこの植物は、言われなければ見落としそうな小さな花だ。その花をカメラに納めたあと、また足早に前を行く池田さんのあとを小走りに追いかける私の足下に、今度は白い花。「これ何ですか？」「あ〜、これも絶滅危惧1B種イヌセンブリ」。そしてその脇には、「高知県では絶滅危惧には入っていないが全国的にはほとんど見られなくなった野生のリンドウ、まだ花は咲いてないけど。」次は、半湿地帯に無数のホシクサが。その次はこれも絶滅危惧1A種ヤナギアザミの群生。絶滅危惧植物十数種が生育するというここは、まるで野生植物の植物園。そして、この珍しい植物の宝庫のこの土地を、四万十町が買い取って保護区とし、野生植物の植物園、ピオトープにしようという構想がある。その構想を推し進める中心人物がこの池田さんなのだ。「この土地には牧野富太郎博士も時々足を運んだという記録もあるようで、本当に四万十町にとっても高知県にとっても重要な場所なのです。この地はなんとしても保護して後世に伝えたいといけな。うなった時には、専門家だけの立ち入れる環境ではなく、誰もが見学できる場所にしたい。その為のお手伝いを今はしているのです。」池田さんは熱くそう語る。

地球上には、科学的に明らかにされている生物種が約175万種、未知のものも含めると3000万種が暮らしているとも言われている。そして近年、そのうちの多くの種が絶滅の危機にさらされている。しかもその大きな要因の一つが、人間活動にあるという。ならば私たちは、この星に暮らす人間以外の生物の存在に時々目を向け、自分たちだけの地球ではないことを考える事も必要ではないのだろうか、池田さんの足元には及ばない



ヒナノカンザシは見落とすような花



イヌセンブリの花



植物多様性は動物多様性にもつながる



その葉っぱの形状から付いた名前、ヤナギアザミ



「ここは絶滅危惧植物の宝庫」と池田さん

にせよ。気がつけば、道端のコンクリートの割れ目から逞しく花を咲かせているタンポポが、秋の風に揺れていた。

\*絶滅危惧1A類 (CR)・・・ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種

\*絶滅危惧1B類 (EN)・・・1A類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種